谷崎潤一郎「孝」の教えをめぐって

――『不幸な母の話』考――

横田彩花

一、『不幸な母の話』

『不幸な母の話』は谷崎潤一郎の母、関が亡くなった大正6年の4年後、大正10年（1921年）に『中央公論』に発表された。第一期の作風が完成した時代である。生活の上でも変化が多かった。大正4年、谷崎潤一郎は石川千代子と結婚し、翌年5月に長女鮎子が生まれた。その翌年に当たる大正6年の5月に関は亡くなった。大正7年、彼は11月から12月にかけて短い間に、朝鮮、満州、天津、北京、漢口、九江、更に上海の周辺各地を旅行した。その少し後の大正8年の2月には父である倉五郎も亡くなったのだ。

結婚生活が始まり、父となってすぐに、両親の相次ぐ死を経験した谷崎はここで人生最大の転機に直面したのだ。

『不幸な母の話』は家族という枠組みの中において、互いに関わっている人間の間に起こる疑念、苦悩、悲しみ、不信、愛情の変化を描いている。この作品にあるような切実な意識は、この時期以前の谷崎の作品には現れていない。それまでに描かれていた家族的な問題は、それとは別の男女間の不安定さ、そこから起こる破滅などを描くための背景として描かれていたものである。

『不幸な母の話』は、家族内の一個人の告白や懺悔によって、必然的に家族の他の人々を破滅させるという重い責任感を伴ったものを描いている。家族のうちの一人にとっての良心の満足、執着、愛情は同じ家族の他の人々にとっての生活の破滅に成り得るという認識は、この時期の谷崎の作品に最

もよく集中している。

中心人物は語り手である、「わたし」（弟）、「兄」、「兄の嫁」、「母」である。

わたしの「母」は夫に対して貞淑な妻であり、子に対しては慈悲深い親であった。「時岡のご隠居様」と言えば「あんな氣樂な身の上はない」と皆が羨むくらいで、親類の女子供も彼女に懐いたし、世間では誰からもちやほやされた。彼女は特に子供たちが自分に孝行を尽くすことを強く望み、またそれを当然であると考えていた。そして、歳を取ることと死ぬということをひどく恐れた。

そんな「母」が全く変わってしまうある事件が起きる。「兄」と「兄の嫁」が箱根から熱海へ一週間の新婚旅行に出た時のことである。「母」は夫婦の帰りを待ちきれなくなり、二人の元へ出かけて行った。そうして三人で熱海を出帆する船に乗って、國府津へ向かった。もう少しで國府津の沖合という所で、船が転覆した。「兄」は勿論泳げたので、二人を懸命に探し、騒々しい叫びの一つに妻を見つけた。「兄」は咄嗟の間にこう考えた。「自分は一度に一人以上を救ふことは出来ない、若し二人を一遍に救はうとすれば、三人ながら溺れ死ぬばかりである。さうして今、偶然にも先に發見されて、自分の手に縋り着いて居る妻がある。自分は先づ此の妻を陸上へ運んでから、然る後に母を尋ねよう」、そう決心した「兄」は「藻掻き苦しみつゝ、執拗に縋り着かうとする人々を夢中で突き除けながら」、嫁を担いで岸へ泳ぎ着いた。そして、再び水中へ戻ったが、「母」が見つからない。「兄」は「母」が溺れて死んでしまったと思い、自分は助かる資格がないと最後まで救助の手を拒む。が、幸いにして「母」は知らないうちに一人の漁師に助けられており、介抱されていた。

しかし「母」は兄夫婦がどんなにか言葉を掛けても、ほとんど返事をしなかった。それ以降、「母」はほとんど子供たちや親類と会話することもしなくなり、その姿は「悲しい音樂」そのものであった。「母」は段々とロクに物も食べないで消えるように死んでしまったのである。息を引き取る時ですら、「あゝお前達、そんなに側に寄らないでおくれよ、お父様がお迎ひに來ていらつしやるんだから。――」と言って、わたしたちを払い除けるようにして死んでいった。

その後「兄」が自殺した。「兄」は手紙を残しており、そこには「母」が変わってしまったいきさつや、「兄」が自殺しなければならない理由も書かれていた。あの事件の際、「妻を抱えて居た私の腕にいきなり縋り着かうとした人が、

それが若しや母ではなかつたかと云ふ事に氣が付いたのは、もう大分時が過ぎた後だつたけれども、――その恐ろしい疑惑に對して私は出來るだけ眼を潰らうとはしたけれども、――しかしやつぱりその疑ひは事實だつたのだ。私は妻の一身を案ずる餘り、母の見分けが付かなかつたのだ。私は妻を救ふので夢中になつて、私の手で私の母を水の中へ突き放したのだ。妻はそれには氣が付かなかつたが、母は確かにそれを知つて居た。死ぬまで其の事を口には出しはしなかつたが、母がそれを知つて居た事は、あの晩以後の彼女の變りやうを見れば、とても疑ふことは出來ない。（中略）母が他人の手で助かつたことは、母の爲めにも私の爲めにも幸福ではなかつたのだ。いや、たとひ私の手で助かつたにしても、母は決して喜びはしなかつたゞらう。『助けるならなぜ最初に助けてくれない？　なぜ私よりも嫁を先にした？』母はきつと、さう云つたに違ひなかろう。『お母様が後になつたのは偶然です』と云つても、『その偶然が恨めしい』と云うだろう。『私を後にするくらゐなら、なぜ三人で一緒に死なゝい？』と云ふだろう。（中略）母はそれから長い間、嘗て自分を海へ突き放さうとしたところの、『親殺し』の悴の顔を毎日々々見なければならなかつた。死ぬ迄その恨みを忘れることが出來なかつた。（中略）いや、私ばかりではない、『子供』と云ふもの凡べてアテにならない、戀人の爲めには親を裏切る不孝者だと思はれたであらう。（中略）母は死んでしまつたけれども、私にはさうは思はれない。私が生きて居る限り、母も生きて居るような氣がする。『どうかお前は孝行な悴だと云ふことを、私に見せておくれ。私を心から喜ばしておくれ。嫁の爲めに命を捨てゝかゝつたやうに、私の爲めにも命を捨てゝかゝつておくれ。』母は始終私の耳に、さう囁いて居るやうな氣がする。私が死なゝければ母は決して喜んではくれないのだ。」とあり、「兄」の書置きはまだ続くが、語り手「わたし」「兄」が気の毒である以上に、「母」は気の毒な人として、いつ迄も「私」の胸に生きて居るのである。

広瀬玲子氏の先行論文（注①）によると、『不幸な母の話』は中国のある小説をもとにしているという可能性について次のように言及している。

中国の文言小説に『閱微草堂筆記』がある。著者は、清の乾隆年間を代表する学者であり、四庫全書の総纂官をつとめた紀昀である。『閱微草堂筆記』というのは、五

回にわたって次々と別の書名のもとに刊行された小説集をのちに門人の盛時彦が合刊したときの書名であり、その第三部に当たる『槐西雑誌』のなかに次のような話がある。（注②）（中略）その中にあって、『不幸な母の話』は内容そのものは中国とは何の関係もない。登場人物の関係や、最初に死者が出るかどうかなど異なる点も多い。しかし、水の事故が起こり、そのあと二人が続けて亡くなることや、兄の遺書と姚安公の議論には、一脈通じるところがあると言えはしないだろうか。

また「孝」についても触れており、

「孝」を儒教的な徳目としてとらえると、一見、谷崎文学の背徳的な耽美の世界とは相容れないようにも思われる。だが、孝を追及するあまり倒錯的な行為にまで至ったという話は、「二十四孝」など中国にも数多の例がある。孝とはそもそも、親を思う気持ちであるが、それと同時にその気持ちが行為として表れなければならないという強迫観念でもある。

もちろん、親を思う気持ちが内にあり、それを行為として外に表すということは普通にあるだろう。しかし逆の方向で、すなわち、一つ一つの行為をことごとく「孝」あるいは「不孝」の表れとして解釈することはできないはずである。にもかかわらず、エスカレートした「孝」はそれを要請し、必然的に人は「不孝」であるということになる。

として、「孝」についての説を展開している。なお、この『閲微草堂筆記』を谷崎が踏まえていたという論に決定的な証拠はないとも本論では記している。

本文中や先行論文にも登場し本論文の主題ともなっている「孝」とは一体どういうものなのか。また、その「孝」の根本ともなる「儒教」について、以下説明することとする。

儒教は中国における国教ともいわれるものであり、仏教、道教とともに、中国文化の根底をなしたものであるのは既知である。五輪五常の道であって、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の五輪と、仁、義、礼、智、信の五常が互いに配合して、人倫の道が完成すると説くのである。この仁義礼智信こそ、儒教の中心問題なのである。

仁とは、人と人との親愛の情であり、親子の愛情である。とりわけ、子の親に対する親愛の情、これを「孝」というのだ。『論語』を中心とする、四書五経といわれるもの、さらに十三経といわれる、儒教の根本経典はいずれもこの「孝」を説いている。「孝」こそまさしく、儒教の根本思想であり、儒教の倫理として一切の道徳の根本をなすものである。

『孝経』の最初に「身体髪膚、これを父母に受く、あえて毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世にあげて、以て父母をあらわす、孝の終わりなり」とある。

まず、「孝」は親から受けた体を傷つけないことである。さらに、「孔子の親に事えるということは、居はすなわち敬をいたし、養はすなわちそのたしなみをいたし、疾はすなわちその憂いをいたし、喪はすなわちその哀をいたし、祭はすなわちその厳重をいたす。この五つ備わればよく親に事う」とある。

常に親を敬う心を忘れてはならない、その生活において親を養う場合、常に親に、楽しんでもらうよう食べ物などにも注意しなければならない。親の病気の場合には、心から案じ憂いて、医師を呼び、あらゆる手を尽くして看病せねばならない。薬石その効なくして、ついに死なれた場合は、その葬送のこと、喪中のことなど、かなしみの極の内に取り行わねばならない。喪が終わって、宗廟にこれを祭ること、あるいは墓前にこれを祭ることなど、「まつり」の規定に従って、誤りなく厳重にこれをとり行わねばならない。

親に対しての「孝」は単に生きている間だけではなく、死後も存在するのである。祖先崇拝は、父祖のまつりからであり、父祖のまつりは「孝」の思想によるものである。

これらの儒教の基本概念、特に「孝」の教えについて念頭に置き、『不幸な母の話』を考察していきたい。

さて、これまでの儒教の「孝」を基にして、『不幸な母の話』の儒教的な側面を探っていく。

まず、単純に『不幸な母の話』の本文中には「親に対する孝」に関わる言葉や文章が随所に現れている。

○私の兄は又彼女を虐待し抜いた不孝者

○私の兄も不孝者ではなかつた、妻に對しては熱烈な愛を捧げた夫であり、母に對しては温良によく仕へた息子であつた。

○私は果たして兄より善き行ひを爲し得ただらうか？

○子供たちは孝行をつくす、親類からは大事にされる、

○「御覧、お前より兄さんの方が孝行だよ。（後略）」

○わたしたちは屢々孝行の試驗をされているやうな氣がした

○「子供たちはこんなにも自分を大事にしてちやほやしてくれる。自分は何不足のない仕合せな身の上だ」

○彼女は自分の事でお世辭を云はれるよりも、自分の子供たちの孝行を褒められる時の方が、餘計滿足な顔つきをした。

○私たちはよく母に怒られたり泣かれたり「不孝者」呼ばはりをされたものだが、

○「何でお前たちが不孝なものか」——母はきつとさう思つて居たであらう。

○自分も又、「孝行な子供」だけでは滿足できないで「孝行な嫁」や「孫」を見たかつたのであらう。

○「うちの悴は感心な者だ。大學では秀才だし、品行は方正だし、親には從順だし、——」

○けれども母は其の幸運を當然のやうに考へ、あんな優しい息子が自分の云ひつけを背くはずはないと極めて居た。

○「散々世話を燒いたのだから、此れからはちつと夫婦の者に恩返しをして貰はなくちや」

○「旅行から歸つて來たら何處其處へ連れて行つて貰ひませう」

○戀人の爲めには親を裏切る不孝者だと思はれたであらう。

○「どうかお前は孝行な悴だと云ふことを、私に見せておくれ。（後略）」

「母」は子供たちの「親に対する孝」を至極当然のことと思い、またそれを子供たちも理解して、「母」から試されることも致し方ないと思っている。「母」は子供たちの「孝」を享受し、少しでも思い通りにならなければ、今までの「孝」はなぜかいきなりなかったものとされ、一気に「不孝者」の烙印を押されてしまう。『不幸な母の話』では積み上げられた数々の「孝」も、偶然による一つの「不孝」によって崩壊してしまうのだ。これを前提として『不幸な母の話』は進められていく。つまり儒教の根本概念である「孝」の存在がこの話では既存のものとして捉えられ、そこから話が展開していく。

『不幸な母の話』の話の中核を成すのは二つの事件とクライマックスである。

一つ目は「母」が鰻を食べた後にうっかり梅干しを食べた時のことである。すると腹痛が起こり、「母」はひどく死を恐れて医者を呼んだが、医者は心配ないと言って呆れ顔で帰った。語り手である「私」もあまりに事件が馬鹿馬鹿し過ぎて友達の家に出かけてしまう。帰ってくると病室で待っていた「母」は目に涙をためて言った。「弘や、お前は此処に居てくれなくつてもよござんす。……みんなが斯うして心配して側に居てくれるのに、そんなに遊びたけれりや何処へでも出ておいでなさい。お前はきつと私の子ではないんだろうから」。無論「私」は「母」をなだめるために謝り、機嫌を取るが、次の日の朝、電報で驚いた「兄」が夜通しかけて帰ってきた。「母」は「私」に嬉しそうに言った。「御覧、お前よりも兄さんの方が孝行だよ。お前は内に居ても外へ出て行つてしまふのに、兄さんは忙しい中をわざわざ夜徹し歸つて來てくれましたよ」。

この事件でわかるのは「母」が死を恐れ、子供の「親に対する孝」にひどく執着し一喜一憂する点、そして弟である「私」よりも「兄」のほうが孝行であると思っているという点である。

「母」は極端に死を恐れる。この設定は物語後半に「母」が家族に一切心を許すことなく死んでいくことで、単なる設定以上の意味を持たせる。「親に対する孝」の執着は既述のことであるが、この事件ではそれによる母の喜びと哀しみの落差に注目したい。彼女は他人から子供たちが孝行者であることを褒められると上機嫌になり、そして自分が大事にされていないと少しでも思うと、涙をこらえきれない女性なのだ。この要素も後の彼女の死につながる需要な要素だ。そして、

最後に「私」より「兄」の方が孝行者であることは、物語の前半でも「私の兄も不孝者ではなかつた、妻に對しては熱烈な愛を捧げた夫であり、母に對しては温良によく仕へた息子であつた。」「私は果たして兄より善き行ひを爲し得ただらうか?」という風に繰り返し訴えられており、これは「私」自身も感じていたこととしてよいだろう。

そして、この三点の要素の為にその後に起こる様々な事件がより一層残酷に描かれていると言っていい。

儒教たる「孝」については、前述した通り「身体髪膚、これを父母に受く、あえて毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世にあげて、以て父母をあらわす、孝の終わりなり」(『孝経』)、つまり「親の病気の場合には、心から案じ憂いて、医師を呼び、あらゆる手を尽くして看病せねばならない」のである。

一つ目の事件は「親に対する孝」というものをわかりやすく読み手に伝えるものとして充分であり、なおかつこの『孝経』の教えにも充分沿っているエピソードである。おそらく谷崎自身もこれらを考慮していたと考える。

二つ目の事件は「母」と「家族」との大きな転換期になる。「兄」と「兄の嫁」が箱根から熱海へ一週間の新婚旅行に出た時のことである。「母」は夫婦の帰りを待ちきれなくなり、二人の元へ出かけて行った。そうして三人で熱海を出帆する船に乗って、國府津へ向かった。もう少しで國府津の沖合という所で船が転覆した。

「妻」を助けてから「母」を助けに戻ってきた「兄」の姿が痛々しい。「母」は死んだと思っていたのだから当然のことではあるが、それでも「母」が死んでしまったのなら自分も助かってはいけないという考え方にはやはりどこか偏りがある。死というものを世間一般以上に恐れていた母が死というものを身近に感じる恐怖を味わい、更には「私」よりも「孝行」であると考えていた「兄」に裏切られるという衝撃がある。この事件があまりにも衝撃的で残酷に映るのは一つ目の事件でこの点が強調されているからである。

この事件以降「母」は変わってしまう。「母」の変化と死、これが三つ目の事件だ。家族の輪にも入らなくなり、会話することもなくなったまま、死んでしまうのだ。「私」は「生前の母の俤——それは今も云ふように非常に悲しいものだつた、母と云ふ人間全體が、むしろ母の存在その物が、悲しい

音樂のやうに悲しかつた」と「母」が死ぬ前の様子を表現している。

さて、なぜ谷崎は「私」より孝行であると思っていた「兄」に「母」を裏切らせたのか。答えは彼自身にある。谷崎潤一郎が青年期に放蕩の限りを尽くし親不孝な行為を繰り返したことは、谷崎自身も語っているところである。

その頃の私は放浪時代で、さま〴〵な惡德に身を持ち崩してゐた。兩親の家は日本橋の箱崎町にあつたけれども、一二年前にそこを飛び出したきりめつたに寄り付いたことがなく、たまにふらりと戻つて來ることがあつても、すぐ親たちを怒らせたり泣かせたりして又ぷいと出て行つてしまふと云ふ風であつた。（中略）親たちは新聞に依つて私の無事を知るのみで、何處でどんな風にして暮らしてゐるのか知るよしもなかつた。（『親不孝の思ひ出』（注③））

また、彼は自分が何故親に逆らうような親不孝者になってしまったのかも、自分自身でその複雑な心境を語っている。

當時私の小さな胸の中には、私を早くから立ち働かして自分たちは寢床にゐる二親の仕打ちを恨む氣持と、かりにも親を恨まうとする己れのねぢくれた根性を咎め、出來れば自分も金次郎や萬吉のやうなあつぱれな子になりたい、そして親たちを喜ばせ世間の人に褒められたいという氣持とが交互に入り亂れた。（同前）

この「ねぢくれた根性」が孝行な「兄」の裏切りに繋がったのだ。そうして「親を恨まうとする氣持」と「親たちを喜ばせ」たい気持ちも見事クライマックスに現れている。

クライマックスは「兄」の自殺である。「母」を裏切り失意のままに死なせてしまった。「兄」は「あゝ、私はほんたうは死にたくない。私は今はの際までも猶彼女を愛して居る。彼女を捨てゝ、此の世を去ることは、さうしなければならなくなつたのは、何と云ふ悲しい運命だらう」と現世に対する未練をつらつらと述べながらも、「『どうかお前は孝行な快だと云ふことを、私に見せておくれ。私を心から喜ばしておくれ。嫁の爲めに命を捨てゝか、つたやうに、私の爲めにも命を捨

て、か、つておくれ。』母は始終私の耳に、さう囁いて居るやうな氣がする。私が死な、ければ母は決して喜んではくれないのだ」と言い残し、死んでしまう。まさに谷崎のいう「親たちを喜ばせ」たい気持ち、そのままなのだ。

谷崎は当時、自分が受けた儒教的教育についてこう語っている。

私が自分の親不孝を意識するやうになり、そのことで良心の苛責を覺えるやうになり出したのは、いつ頃からで、何が原因であつたらうか、と考へると、先づ何よりも思ひ出されるのは、遠い昔の小學校時代の修身の時間のことである。（中略）私の時代の修身と云へば、殆ど天皇に忠義を盡すこと、、父母に孝行を盡すこと、を説き聽かすことに、大部分の時間を費やしてゐたやうな氣がする。（中略）孝行に關する説話は、それを初めて聞かされた頃は全く無邪氣に、子供らしい感銘を以て受け取つたゞけのことであつたが、たび〳〵繰り返して聞かされて行くうちに、次第にそれが親たちに對する自己の行為を規制する尺度として働き、心に重く蔽ひかぶさるやうにならずにはゐない。そして私はいつからともなく、「自分は親不孝の子である」と云ふ苛責の念を、絶えず感ずるやうになつた。今から考へると、いくらあの頃の教育が「儒教的教育」であつたからと云つて、あんなにまで孝道を力説しなくてもよくはなかつたかと思ふ。親たちも亦何かと云ふと、「親に楯をつく」「親を馬鹿にする」「罰あたりだ」「云ふことを聽かないやつだ」「今にロクな者になりはしない」など、云ふ語をすぐ口にした。（同前）

このように、谷崎は幼少時代において、その価値観の根底に「孝道」という儒教的観念を何度も教え込まれた。そして、刷り込まれるように身についた「孝道」に対して谷崎は疑念と反発心をもつ。実際に親に対しての「孝」とは何かを犠牲にして成し遂げるものなのか。あるいは何か（誰か）の犠牲の上に成り立つからこそ意味があるのか。しかし、その「孝」一つを貫くために他の全てを不幸にしてしまう究極の場合も当然ありうる。行き過ぎた「孝」が生む悲劇、それが『不幸な母の話』である。

また、全体の構成を通して言えることは、相反する設定で

強調される残酷性、である。

陽気だった「母」が周囲に誰も近寄らせず、一切心を許さなくなり、孝行だった「兄」が「母」を裏切り、死を恐れた「母」が孤独に死ぬ。全てがあの転覆事件を境に正反対になっている。より残酷性を増す為の設定であろう。

そして、いきすぎた「孝」という印象のある『不幸な母の話』だが、それでも「私」という語り手は初めから終わりまで態度を一貫させている。初めから「私は、孰方かと云へば母の方に同情する」と主張し、最後にも改めて「兄が氣の毒である以上に、母は氣の毒な人として、いつ迄も私の胸に生きて居るだらう」と強調している。

これは一見、語り手である「私」自身も儒教の教えである「孝」に傾倒しているように見えるが、むしろ谷崎自身の「孝」に対する痛烈な皮肉の現れとして受け取りたい。

二、谷崎潤一郎の中国への関心と道徳的属性

谷崎潤一郎は幼い少年時代から漢詩に慣れ親しんでいた。彼は高等科の担任である、稲葉清吉先生に出会う。

『幼少時代』（注④）において谷崎は先生のことを「愛読書には支那の古い聖賢の書、仏教――主として禅哲学の書を始めとして、平安朝から徳川時代に至る和歌や軟文学の書にまでおよび、その範囲は実に広汎であった」とし、「先生の思想は王陽明派の儒学と、禅学と、それにプラトンやショーペンハウェルの唯心哲学を加味したものであったらし」いと解説している。

稲葉先生はまだ少年であった谷崎の才能を早くから見出し、その才能を生かす方向に努めた。谷崎自身も「これは私の己惚れかも知れないが、思うにある時代の稲葉先生は、私の将来にすべての望みを懸け、自分の受け持ちの級の中に、私と云う生徒のいることに生き甲斐を感じていたのではあるまいか。笹沼や木村も気に入られてはいたけれども、此の二人は孰方かと云えば理科系統の秀才であったから、私のように先生の言動に強い反応を示すことはなかったので、先生としては私を自分の鋳型に嵌めることに力を注いだのではあるまいか」と特別な熱の入れようを回想しながら、「先生の方針は近頃云うところの早教育、もしくは天才教育とも云うべきものので」あるとしている。こうして谷崎は先生の「天才教育」に傾倒していった。

稲葉先生にこれらの教育を受けながら、なお谷崎は英語と

漢学の塾にも通った。塾の先生は貫輪吉五郎という漢学者であり、医術も研究していたという。

この頃の谷崎の漢文における稀な才能が文壇デビュー後大きく開花することは言うまでもない。谷崎文学の本質的な芽生えはこの時期に形成されたと言ってよい。谷崎自身も「自分が小説作家として今日までに成し遂げた仕事は、従来考えていたよりも一層多く、自分の幼少時代の環境に負うところがあるのではあるまいか、と云うことである。私は今迄、自分が今あるような人間になったのは、青年時代以後の学問や、経験や、社会との接触や、諸先生諸友人との切磋琢磨に寄るのであると考えていたけれども、今日に至って振り返って見ると余人は知らず、私の場合は、現在自分が持っている大部分が、案外幼少時代に既に悉く芽生えていたのであって、青年時代以後においてほんとうに身についたものはそんなに沢山はないような気がするのである」としている。

さらに「私が『幼少時代』に於ける小学校の『稲葉先生』などから学び取ったものは後年いろいろな形で様々な作品の中に跡を印しているのであるが、（それはその稲葉先生が特別に優秀な先生だったせいでもあるが、）中学以後の先生たちから受け入れたものは、それに比べればさほど著しい感化を遺していない」とまで明言している。

谷崎に関してはその独自の女性観や奇抜な人物描写、背景設定から彼の青年期の放浪時代や結婚、女性関係などに目を奪われやすいが、どのような要素を作品に加えようともその本質はいつもこの少年期に培った漢学であったのだ。

そして、この中国への関心の中でも最も大きな影響を受けたのが儒教であり、「孝」である。

谷崎がどのような儒教的教育を受け、また「孝」に対してどのような意識を持っていたかは前章で記した通りである。

いかにも道徳的なこの観念は従来谷崎文学研究においてはあまり指摘されて来なかった。

谷崎は明治43年（１９１０年）に、先輩の小山内薫を中心に同人誌「新思潮」を創刊した。その当時は、明治40年ごろから勃興した自然主義文学が隆盛を極めており、谷崎のようなロマン的な唯美主義の小説は受け入れられなかったのである。

谷崎の文壇における華やかなデビューを飾った作品である『刺青』（注⑤）は、具体的には「美しい者は強者であり、醜

い者は弱者である」という谷崎文学の最も重要な主題が展開され、絶賛された作品である。よく知られていることであるが、永井荷風はこの作品について高い評価（注⑥）をし、その後に谷崎文学の特質として三つの要素を挙げたのである。

第一は肉体的恐怖から生ずる神秘幽言である。肉体上の残忍から反動的に味いえらるる痛切なる快感である。（中略）第二の特徴は、全く都会的たる事である。江戸より東京となった都会は氏の思想的郷土であるがゆえに、広く見れば氏の作品は全く郷土的であると云える。（中略）最後に谷崎氏の作品の特徴とすべき所は、文章の完全なる事である。現在の日本文壇は人生のためなる口実の下に全く文学的製作の一要素たる文章の問題を除外してしまった後なので、自分が今更の如き論議を提出するのを愚を笑うかも知れぬ。（注⑦）

荷風によってこのように分析された谷崎文学の要素は後年に渡って様々な形で引き継がれていると言われている。谷崎文学の悪魔主義や耽美主義の優位性について主張した先行研究は数多くある。

これらの先行研究を見るとわかるのは、谷崎研究において彼の作品は「美しい者は強者である」という一文に象徴される耽美主義、「男の生血に肥え太り、男のむくろをふみつける」という一文に要約される悪魔主義を中心に、その絶対性ばかりに目が向けられてきた点である。しかし谷崎は果たして悪魔的な美の価値に優位性を置いていたのであろうか。私は、この悪魔的な美の価値観は他の価値観と対をなし、その相対性によってより強く魅力的な価値観となるのではないかと考える。それはもちろん前章で記した谷崎の儒教、特に「孝」に対する執着と反発によるものである。

谷崎が儒教的教育を受けていたころが、最も自分の作品に影響しているということは度々本人によって明言されていることは先程確認した。

そして、谷崎の文学の特性が悪魔主義ではなく実は道徳的属性であると主張している者を同時代に求めるならば、例えば芥川龍之介が挙げられる。彼は「文藝的な、余りに文藝的な」（注⑧）でこのように語っているのだ。

なぜ又広くしてゐるかと言へば、僕等の精神的生活は道徳的属性を加へることにより、その属性を加へない前よ

りも広くならずにはゐないからである。（勿論道徳的属性を加へると云ふ意味も教訓的たると云ふことではない。物質的苦痛を除いた苦痛は大半はこの属性の生んだものである。谷崎潤一郎の悪魔主義がやはりこの属性から生まれてゐることは言ふまでもあるまい。［悪魔は神の二重人格者である。］

晩年の芥川が小説観をめぐって谷崎と論争したことはよく知られている。芥川は「あらゆる小説中、最も詩に近い小説」が一番であり、珍奇な題材とか鬼面人をおどかすような主題とか複雑に入り組んだ構成などを、すべて小説の芸術的価値という点では第二義的以下のものと見なし、そこから詩に近い小説が一番純粋だ、という評価を導き出している。

小説論では完全に食い違っている両者だが常に深い親交があり、谷崎自身、芥川と似通った部分があることを認めていた。

そんな芥川が谷崎の文学の特性を「道徳的属性」であると述べ、「悪魔主義」さえもその「属性」から生まれたものであると主張している。

谷崎の作品は常に反発を伴っているのではないか。世間が重要だとするものを愚かだとし、世間が愚かであるとするものを貴いとする。それは『刺青』の時から繰り返し示されてきたのだ。彼の耽美主義や悪魔主義は優位性のあるものではなく、軸には常に世間と同じ道徳的な思考があり、耽美主義、悪魔主義はそれに対する反発の結果にすぎないのではないだろうか。

『不幸な母の話』では、「母」「兄」「兄の嫁」との間に起きた不幸な出来事を「語り手」である「私」が思い出すように語っていく。この作品は谷崎の親愛なる母、関が亡くなった後書かれたものであるため、母恋いの作品であると捉えられやすいのだが、私はこれを儒教的作品として捉え、「母」を中心にというよりも親に対する「孝」という概念を中心に物語の展開を追った。すると、いかに谷崎が「孝」という概念に執着していたかが確認できた。

その上で「孝」の教えに抗うように、いきすぎた「孝」の悲劇を作り出し、痛烈な皮肉を加えた。構成の上でも、更に残酷性を加えるような設定ばかりをしている。そしてその設

定は相反するものを組み合わせることを中心に行われていることを確認した。

谷崎文学を語るうえで欠かせない要素の一つとなっている、耽美主義や悪魔主義であるが、彼は本当にそれらを中心に置いて作品を創作していたのかという疑問を提示した。そこで芥川の主張も用いて、彼が作品の裏に常に忍ばせていたのは道徳的概念であるとし、耽美主義や悪魔主義はこれらに反発するようにして生まれたものであると主張した。

谷崎は幼少時代において、その価値観の根底に「孝道」という儒教的観念を何度も教え込まれた。そうして「孝」という価値観を半ば強制的に教え込まれた感覚がどうしても拭えなかった谷崎に「自己の行為を規制する尺度として働き、心に重く蔽ひかぶさるやうに」なったと考える。その「孝道」という世間に尊ばれるような概念に抗うように、相反する概念である耽美主義や悪魔主義の作品を生み出したのだ。

【注】

① 「孝」の呪縛：谷崎潤一郎「不幸な母の話」試論（廣瀬玲子、２０１０年10月20日、専修人文論集87、専修大学学会）

② 東光に王莽河という川がある。すなわち『書経』に見える姑蘇河であって、日照りには水が涸れ、雨が降れば水がみなぎって、渡るにはいつも難儀をする。母方の伯父の馬周簷公が次の様な話をされた。

雍正の末頃、一人の乞食女が片手に息子をかかえ、片手に病気の姑の手を引いて、この川を渡った。だが川の中ほどまで来たとき、姑がつまずいて倒れた。女は子供を水に投げ出し、一生懸命姑を背負って岸にあがった。しかし姑はひどく怒って、

「私は七十の婆さんだよ。死んでもどうということはない。張の家の数代は、あの子のおかげで祭りを絶やさないはずだったのだ。おまえはどうして息子を棄てて私を助けたのだい。うちの先祖の祭りを絶やしたのは、おまえだよ」

女は泣きながら何も言えず、ひざまずいているばかりであった。

それから二日後に、姑は死んだ孫をいたむあまり何も食べずに死んだ。女はむせび泣くばかりで声も出せず、数日間呆けたようになって座っていたが、やはりそのまま死んだ。どこの人であるかもわからず、ただ姑が女を叱ったときの言葉で、張という性であることがわかっただけであった。

この事件について、次のような趣旨の論を書いた人があった。息子と姑とを比べれば、姑のほうが重い。姑と祖先を比べれば、祖先の方が重い。もしもこの女に夫がいたり兄弟がいたりしたならば、息子を見棄てたのは正しい。ただ、二代とも貧乏な寡婦だけで、血筋はただ一人の息子である以上、姑が責めたのが正しい。この女は死んでもなお悔いが残るであろう。

しかし姚安公は言われた。

「道学を論ずる連中は、どこまでも人を責めてやまないもの

だ。だいたい急流が逆まいて、少しでも気を緩めれば流されてしまう状態は、さきのさきまで熟慮していられる場合ではないのだ。両方とも救うことができないとなれば、息子を棄てて姑を救う、これが天理の正しさであり、人心の落ち着くところなのだ。もし姑が死んで息子が生き残ったら、女は生涯心残りに悩まされはしまいか、また、息子を愛するあまり姑を棄てたと責める者がありはしないか。しかも息子はまだ赤ん坊である。育つか育たないかも、まだわからない。もしも姑が死んだあと、息子も若死にしたら、そのときの後悔はいかばかりであろうか。この女の行為は普通の人の場合よりはるかに優れたものである。不幸にして姑が自ら命を絶ったので、それに殉じて死んだのも、哀れむべきことだ。

それなのにまだ、得々と自らの見解を語って義理を極める学問だなどと言うのは、白骨に罪を抱かせ、草葉の陰まで恨みを持って行かせるものではないか。孫復は『春秋尊王初微』を書いたが、それによると春秋時代二百四十年間に、批判すべきことだけあって褒められる行為がない。胡致堂の『読史管見』では、夏・殷・周の三代以後、完全な人間はいないことになった。

③『親不孝の思い出』（初出「中央公論」、１９５７年発行、谷崎潤一郎全集第27巻、１９８２年発行、中央公論社）

④『幼少時代』（初出「中央公論」、１９５５年発行、谷崎潤一郎全集第29巻、１９８５年発行、中央公論社）

⑤『刺青』（初出「新思潮」、１９１０年発行、谷崎潤一郎、谷崎潤一郎全集第1巻、１９８１年発行、中央公論社）

⑥「明治現代の文壇に於いて今日まで誰一人手を下すことの出来なかった、或いは手を下そうともしなかった芸術の一方面を開拓した成功者は谷崎潤一郎氏である。語を代えて云えば谷崎潤一郎氏は現代の群像作家誰一人持っていない特権と技能とを完全に具備している作家なのである。」

⑦『谷崎潤一郎の作品』（「三田文学」、１９１１年発行、永井荷風、三田文学会）

⑧『文藝的な、あまりに文藝的な』（初出「改造」、１９２７年発行、芥川龍之介、改造社）

【参考図書・参考文献】

・『伝記　谷崎潤一郎』（１９４７年発行、野村尚吾、六興社）
・『谷崎における女性美の変遷――西洋文学との関係を中心として――』（２００７年発行、）
・谷崎潤一郎と孝子説話（田鎖数馬、２０１０年、高知大国文41、高知大学国語国文学会）
・『谷崎潤一郎とオリエンタリズム：大正日本の中国幻想』（２００３年７月発行、西原大輔、中央公論新社）
・『儒教思想』（１９８４年発行、宇野精一、講談社）

（よこた・あやか　博士課程前期）